
この青空の下で

れみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この青空の下で

【Nコード】

N9785C

【作者名】

れみ

【あらすじ】

「次は絶対勝つ！！」「俺は、あんな女お断りだ。」「終わりの待つ世界で、互いに負けず嫌いな二人が魔術学院を舞台に繰り広げる異世界恋愛ファンタジー。終わらせないために、二人はどう世界に立ち向かうのか。

プロローグ（前書き）

初めての小説なので、まだまだ下手ですが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

一部残酷な描写などがあるので、苦手な方はご注意ください。

プロローグ

私たちは、何処から来て、何処へ行こうとしているのだろうか。

・・・・・・・・愛しいあなたは、もういない。

どんなに泣いても、その涙は雨になり、
あなたが、あなたの笑顔が、眼差しが、
帰ってきはしなかった。

いつしか私の流した涙が海となった。
私はそこに、生命いのちを与え、
ここに、あの人の愛した世界を創った。

やがてそこには、あなたと同じ“ヒト”が生まれた。
私はそれが嬉しくて、彼らに私のチカラを少しだけ与えた。

それでも・・・・・・・・

やっぱり、あの人はいない。

千年たっても、一万年たっても、私はひとり。独りぼっち。

もう、あの人の私を呼ぶ声も思い出せない。

いつか、

あの笑顔も眼差しも、

過ごした時間さえも忘れてしまうのだろうか。

そう考えることが

恐くて、恐くて、恐くて……。

ワタシハダレ……？

今や、自分の名も思い出せなくなってしまった。

あの人が付けてくれた、私の存在を確立してくれた、

大切な、大切な、私の名。

私の名は、そのままこの世界の名でもあった。

この世界も私と同じように、あの人に愛してほしかったから。

けれど、この世界に住まう人々でさえ、

はじめから誰もその名を知らない。

名は、その存在を表すもの。

だから、

私はその名を忘れた瞬間から、この世界はひどく不安定な存在になっ
てしまった。

・・・いつそ、すべてが終わってしまえばいい。

あの人のいないこの世界に、何のイミがあるのだろう。

もはや、何処にも私の存在を確立してくれる者はいない。

この世界ももう、長くはもたない。

私の涙は枯れた。笑顔は気の遠くなるような昔に消えている。

これ以上、つらい思いをするくらいなら、

愛しい思い出だけを胸に、

この世界も私と共に・・・・・・・・

プロローグ（後書き）

はじめまして れみです。

初書き小説が、異世界恋愛ファンタジーということですが・・・
さっそく訳の分からない文章でごめんなさいUUUU

次からは、もっとましな文をかくぞー！！

第一話 魔術学院シルフィード

草花は春風に吹かれその身を揺らし

暖かな日差しが降り注ぐ

そして、空は何処までも青く澄み渡っている。

神聖シルヴィアス王国は、古より魔術発祥の地として栄えてきた。
その王都アルファンにある王立シルフィード魔術学院は、この世界
最高峰の魔術師教育機関である。

私、ソフィア・ドレッセルはこの春学院の最高学年に進級した。

6年制のこの学院は、ある程度魔力のあるものならば、12歳になれば誰でも入学できる。

まあ、“誰でも”と言っても、魔術のある者の血筋はほぼ全て貴族たち特権階級が独占している。

つまり、ここには良家のご子息・ご令嬢ばかりが集まっているのだ。

そんなわけで、私のような平民がこの学院にいるのは、かなり珍しいそうだ。

なぜ特権階級でもない私に魔力があるのかというと……

いや。やっぱりやめておこう。その事を考えると、きっと、新学期
そうそうブルーな気持ちになってしまふから。

開けられた窓から吹き込んだ風が、そつと髪と頬を撫でる。

教室の一番後ろの窓側の席。そこが私にとって一番落ち着く席だ。そこに座り、片肘について手のひらに頬をのせる。

ふと、窓の外を眺めていた女の子2人の会話が耳に入った。

「ねえ、あそこにいらっしやるの、エルセイム様じゃないかしら。」

「ほんとだわ。相変わらず、今日もお美しいですわ。」

「わたくしなんか、あの方と目が合っただけで胸が張り裂けそう・・」

「まあ！！いつも目がお合いになりましたの。羨ましいですね。」

「ああ。一度でいいからあの方の腕に抱かれてみたい……。」

「……」「……」「……」

・・・なんて、完全に妄想の世界に突入しちゃってる。

私はそのままの姿勢で視線だけ窓の外に向ける。

丁度、さっきの二人、いや、この学園の全ての女の子の噂的と言

つても過言ではない人物の姿が目に入った。

エルセイム・ウィル・セーヌ・シルヴィアス

名前からも分かるように、彼はこの国の王族である。
大抵の女の子たちは、彼の気を引こうと必死である。
一族繁栄のため、王族の血ほしさに近づく者もいるが、純粹に彼に惚れてしまった子も山のようにいる。

・・・無理も無いと思う。

色素の薄い、明るいブラウンの少し猫っ毛の髪。

透き通る宝石のようでもあり、燃え盛る炎のようでもある、赤い瞳。
白くきめ細かい肌。悔しいけど、女の私よりきれいな肌だと思う。

それでいて、バランスのとれた整った顔立ち。

でも、決して女っぽいななんてこともない。

はつきり言って、かつこいい。その辺の男じゃ相手にならないと思う。

その上、成績は常にトップで魔術の才能にあふれ、武術にも長けている。

これでモテないはずが無い。

そんなことを考えていると、ふと廊下が騒がしくなってきた。
どうやら、麗しのエルセイム様がやって来たようだ。

「いつ見ても素敵っ。」とか「本当にほれほれする美貌ですわ〜。」
なんて騒いでる女の子たちを
気にも留めず、当の本人は涼しい顔して教室に入ってくる。
そして当たり前のように私の前の席に座る。

そう。何の因果か私と彼は6年間ずっと同じクラスなのだ。
ほかの子が聞いたら羨ましがるかもしれない。
でも、私にとってはちっともうれしくなんかない。

今ここで宣言しよう。

私は、エルセイム・ウィル・セーヌ・セルヴィアスのことが、大嫌いだ。

第二話 俺があいつを嫌いな理由

風に吹かれて舞う花びらの中

俺たちは今日も

変わらぬ日常を生きていく

ここ、王立シルフィード魔術学院では、昨日から新学期が始まった。この学院は全寮制で、生徒たちは皆親元を離れて生活している。

なんでも、親元を離れることで階級意識をなくし、皆平等に仲良く学ぼう、という、学院の方針があるらしい。

そんなわけで、王族であるこの俺、エルセイム・ウィル・セーヌ・シルヴィアスも例外なく寮生活を送っている。

小鳥のさえずりの中、今日もまた一日が始まった。

教室に入ると、窓際の後ろから二番目の席に座る。

本当は一番後ろがいいが、そこはいつもあいつに先取られる。

あいつ……ソフィア・ドレッセル

彼女はこの学院にはめずらしい平民の出だ。

だが、珍しいのはそれだけじゃない。

彼女の容姿は、この辺りではかなり珍しいものだと思う。

夜の闇を思わせる漆黒の髪に、黒曜石の様な瞳。

黒目・黒髪のとちらか一方を持つ者は、何人か見たことはあるが、その両方を兼ね備えたものは、

彼女以外に見たことが無い。

それに加え淡黄白色の肌に、俺たちとは違う顔立ち。

入学当初、彼女は俺以上に目立った存在だったように思う。

彼女は随分田舎から来たらしく、珍しい容姿の上、字が読めなかった。

この国の識字率は、近隣諸国に比べ比較的高く、平民でもほとんどのものが読み書きはできる。

それなのに読み書きのできなかった彼女は、よほど教育の行き届いていない田舎からなのだろう。

なぜ彼女に魔力が、それもかなり強大なもの、があるのか疑問ではあるが、

俺にとってそんなことは全くどうでもいいことだ。

ただ、ひとつ宣言しよう。

俺は、ソフィア・ドレッセルのことが、大嫌いだ。

なぜ嫌いかって??

それは、彼女が俺のことを嫌っているからだ。
別にあいつに好かれたいと思っっているわけじゃない。
でも、面と向かって

『あんたなんか、大嫌いっ!!』

なんて言われたら、普通腹立つだろ??

あれは確か、入学して半年ほどたった、初めての野外授業のときだったと思う。

生徒の一人が術に失敗して、魔力のコントロールができなくなった。
このままでは爆発を起こす可能性があって危ないからと、教官が俺
たちに出るだけ遠くまで
逃げるようにいった。

あわてて逃げる生徒達の中、俺はあいつが逃げずにしゃがみ込んで
いるのに気がついた。

「おい、何やってんだよ。爆発に巻き込まれるぞ。」
俺は戻ってあいつに言った。

あいつは一瞬びっくりしたような顔をして
「ごめん。ネックレス落としちゃって。大事なもののな。」

と言った。

こいつ馬鹿か！！もういつ爆発がおきてもおかしくないのに。そう思った瞬間、俺は、背後で魔力のすさまじい膨張を感じた。

やばい！！爆発だ！！

とっさにあいつを突き飛ばして、俺自身も後ろへ飛び退いた。

「・・・っ痛・・・」

起き上がったあいつを見て、怪我はないようだと思安したのも束の間、あいつは急に

さっきまでいた場所に走りよった。

「どうしたんだよ。また爆発が起こるかも」何てことすんのよっ！！」

俺の言葉をさえぎってあいつは怒鳴った。

彼女の足元には、もとは何だったのか分からない、恐らくネックレスの残骸と思われるものがあつた。

「悪い。でも怪我無くてよかったじゃ

「バカ！！あんたなんか大嫌い！！」

再び俺の言葉をさえぎったあいつは、泣きそうな怒った顔で叫んだ。その言葉が癪だった俺も、

「それが助けてくれたやつに言うせりふかよ！！だいたい、ネックレスを落としたお前が悪いんだろこのドジ！」

売り言葉に買い言葉でとっさに言い返してしまった。

ちよっと言い過ぎた、とも思ったがあいつは負けじと言い返してき

た。

「ドジとは何よ！このバカ王子！！」

「ドジにバカって言われる筋合いはねえよ！！」

「なんですって！！」

その後、教官が止めに入るまであいつと言いつつ合っていた。

それ以来、俺とあいつは、何かにつけていがみ合う仲になった。

第二話 俺があいつを嫌いな理由（後書き）

こんにちわ^^れみです。

第二話はエル視点ですが、なんだかエルセイム君の性格が、微妙な気が・・・。

これから、主人公ふたりのいいところもちゃんと書いていきたいとおもいます。
でわ

第三話 まだ、終わらない

もしも、この現実が虚像であつても

そこに生きる私たちにとっては

それこそが偽りの無い、世界の全てだ

「あつ。おはようございます！ソフィ！」

教室に入るなり、元気のいい挨拶をしてきたのはアニエス・ラ・ローランだ。

ウェーブのかかった、太陽のようなブロンドの髪に、エメラルドの瞳の彼女は、人懐っこい笑顔が印象的でかわいらしい。

「おはよう。アニエス、ジュリア」

私は、アニエスとその隣にいるジュリア・ド・レオモンドに挨拶を
かえず。

まっすぐな栗色の髪に、深い海を思わせる瞳の彼女は、落ち着きがあつてすごく大人っぽい。

この二人とは、入学当初なかなか学院に馴染めなかった私に声をかけてくれて以来、
なにかと一緒に行動するようになった。

二人とも、平民である私に偏見など持たず接してくれる、いい友達だ。

授業が始まるまでの他愛の無い会話のなかで、ふとジュリアが訊ねてきた。

「そういえば、ソフィはもうこの間の試験の順位は見ました？」

「ううん。まだ見てないよ。」

そう返すと、今度はアニエスが笑顔で言った。

「さっきジュリアと見てきたのだけれど、ソフィ二位だったのよ。すごいじゃない。」

「ええ。ソフィは実技はだめなのに、ペーパーテストは得意ですものね。」

「そうですね。ソフィは魔力は人一倍ですが、コントロールはさまざまなもの。」

褒めてるのかと思いきや、なんだかジュリアもまじって私のことを馬鹿にし始めたようだ。

ひどい！！人のことばかりにして！！

「そんなこと言わないでよ。悩んでるんだから！！ホント、誰か私にコントロール力を分けてほしい。」

なんて、無理な願いを口走ってみる。

それにしても、私が二位ってことは、

「一位って、もしかして・・・」

「そうそう。一位はまたエルセイム様ですよ。相変わらずすごいですわね。」

アニエスが心底感心したように言う。

「これでソフィはエルセイム様に二連敗ですわね。」
そう、ジュリアに痛いところをつかれて少しむっとする。

確かに前回の試験でも私が二位でエルセイムが一位だった。
なんかすごい悔しい。

そう思っていると、教室の前のほうで他の男子としゃべっていた彼と目が合った。

なに、あいつ。絶対私のこと鼻で笑ってるでしょ？

「次は絶対負けないっ！」

そう言っつて、彼のことを睨んだ。

「エル、お前こないだの試験の順位見た？また一位だったぞ。」

朝教室に入るとすぐ、ゲイル・ファン・ローリーに声をかけられた。
こいつは、一年の頃からいつもつるんでる俺の親友だ。

赤い髪に緑の目で、一見ちゃらついたように見えるが、いいやつだ。

「まじ???へーすげーじゃん俺。」

俺は人事のように言う。

「うわっ。その言い方嫌味かよ。てかエルこれでソフィア・ドレッ

セルに二連勝だろ。」

ゲイルに言われてそうだった、と思い出し教室の後ろで他の女子と雑談しているあいつの方を見た。

一瞬、目が合った。

うわっ。なんか睨んでるよ。こえー。

「にしても、お前実際のところソフィア・ドレッセルのことどう思ってるの。」

唐突に聞かれて少しびっくりした。

どうって、別に・・・

「どうとも思ってない。それがどうかしたのか。」

そう、驚きを隠して答えた。

「ふーん。まあ、エルは知らないかもしれないけどあの子最近人気あるんだぜ。」

「ほんとだよ。あんなの何処がいいんだよ。」

ゲイルの言葉に対して、今度は思ったことを素直に言った。

冷静に考えれば、あいつを狙ってるやつらの大半は一族繁栄のためにより強い魔力が欲しい、とか
そういう目的だろう。

平民なら、正妻は無理だが側室には簡単に出来るというのが、貴族たちの考えた。

・・・にしても、俺なら絶対あんな女お断りだ。

シルフィード魔術学院院長、シュライデン・ド・シルフィードは院長室の窓の外を眺めながら一人ため息をもらした。

今年七十歳を迎えた彼は、若い頃には最強の魔術師としてその名を戦場に轟かせていた。

現在は代々のシルフィード家の者がそうであつたように魔術学院の院長をしているが、その実力や名声は今も衰えてはいない。

今年もまた、新入生が入学し生徒たちは日々学問に取り組んでいる。そして、あの黒髪の少女が”こちら”へ来てもう六年にもなる。月日が経つのははやいものだ、と思い知らされる。

・・・これは、何の変哲も無い普通のこと。日常である。けれど・・・。

この世界は今、著しく不安定な状態にある。数年前からその兆しはあつたが、ここへ来てさらに不安定になってきた。これまで何千、何万年と存在していた世界はそう急に安定を失ったりしない。

だが、世界は今穏やかにゆっくりと、けれど着実に、”終わり”へ

向かっている。

そのことに気づいているものがはたして何人いようか。

偽りの平和はいつか終わりを告げる。

諸外国が異常気象や凶作、災害によって多大な被害をうけている中、この国だけが平和だ。

それはただ、今はまだ、このやさしい夢が

「終わらないでいるだけ・・・か・・・。」

今我々にできるのは、この国の平和が、嵐の前の静けさでないことを祈ることだけだ。

この学院の生徒の、いや、世界中の人々の未来のために。

第三話 まだ、終わらない（後書き）

なんだか、長々と書いたわりに、主人公二人のからみがない！！第三話でこの調子じゃ、この先どうなるか不安ですUUUU><；
反省！！

この世界はこれからどうなっていくのでしょうか。
そして二人の関係は・・・？
ソフィアはいつたい何処から来たのか・・・？

楽しみにしていてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9785c/>

この青空の下で

2011年1月19日02時41分発行